

## 特別企画 名誉会員インタビュー

## 日本放射線技術学会名誉会員 山田勝彦先生

日 時：2009年10月24日(土)10:00～10:30 岡山コンベンションセンターにて収録  
interviewer：日本放射線技術学会編集担当理事 杜下淳次(九州大学大学院)

山田勝彦名誉会員(以下、山田)、杜下淳次(以下、杜下)：おはようございます。

杜下：この会場(岡山コンベンションセンター)では第37回の秋季学術大会が開催されていますが、本日は日本放射線技術学会の名誉会員であります山田勝彦先生においでいただきまして、インタビューを行いたいと思います。山田先生よろしく願いいたします。

山田：こちらこそよろしく申し上げます。

杜下：山田先生の本学会でのご経歴を拝見させていただきますと、1969年から1990年までの22年間にわたって理事をお務めいただき、今の(日本放射線)技術学会の創設期をおつくりいただいたということをお聞きしています。先生が技術学会と出会われた当時の様子、どういうきっかけで技術学会に入られたかについてお聞かせください。

### 技術学会との出会い

山田：そうですね。当時は地方の都道府県技師会と技術学会支部が各県単位で共存していました。私は昭和31年に京都のレントゲン技術専修学校を卒業し、同時に大津市民病院に就職を決めましたが、就職するやいなや技師長さんから直ちに学会と技師会に入りなさいと言われて、先輩技師の皆さんが入っていたので訳も分からずに入会したのがきっかけです。でもこの入会が私にとっては後の学会活動の出発点となったと思っています。当時、私の母校の恩師であります木村幾生先生が、京都大学医学部附属病院放射線科で放射線計測学領域での研究をやり始められた頃でした。私は大津に就職しましたが、あるとき木村先生から「山田、仕事が終わったら夜実験するから手伝え」と言われまして、当時、私は京都市中京区に住んでいましたから、大津への通勤はおよそ1時間あまりでしたが、家に帰って夕食を食べて、だいたい夜7時頃から実験が始まり、11時か12時頃まで毎晩ではないのですが、週3～4回お手伝いしました。同時に京都大学医学部附属病院で働いていた同期の平井さんなどの友人も2～3人一緒になってお手伝い



をしましたし、後に京都市立病院の部長になられた森川進先生にもディスカッションなどに参加していただきました。このような期間は数年続きましたが、そのおかげで実験、研究とはこういうものということをお聞きいただき、この機会を通じてしっかりと教えていただきました。この体験は私の将来にとってはすばらしく大きな財産となったと感謝しています。そして学会に入会した翌年には新潟で技術学会総会がありまして、そこで初めて壇に上がって発表し、足がガタガタ震えたのを覚えています。

数年して私が27歳くらいになったときですが、毎年の総会で研究発表していたものですから、近畿の学会理事の方々から「あれよくやるなあ」ってことに着目していただきまして、当時の技術学会では奈良医大の林周二先生というすばらしい先生が編集委員長をやっておられて、編集委員に山田なれということ京都支部を通じて誘われました。ちょうどこの頃は京都大学附属病院の放射線科のなかに技術学会の事務局がありましたので、比較的、近くでもあり編集委員にはなったものの、何か訳の分からない状態でした。このことがその後の役員につながることは、このときには分かりませんでした。ただ一言、林周二先生は理事のなかですばらしい若手の先生で、学会に対する関心が極めて強く、その他の理事の方々も技師会の学術部のような学会であるという感覚に対し、

先生はお酒がお好きで一緒に飲みながら「学会はこうあるべきだ」と懇々と、本当に学会のことを強く強く話していただきました。私は林先生に教えていただきながら、なんとか頑張ろうと思ったのが技術学会との付き合いの始まりです。

### 学会役員として大切にしてください

杜下：先生は学会の理事をなさっている間に編集委員会、庶務委員会、企画委員会、総務理事、研究奨励選考委員会、梅谷賞選考委員会、表彰委員会と多くの委員長職をしていただき、そして1988年に会長になられ、3年間お務めされました。

山田：そうですね。

杜下：先生がこの30年を超える学会運営のなかで大切にされてきたことがございましたらお聞かせいただきたいのですが。

山田：今申し上げたことの続きになるのですが、林周二先生の薫陶を受けて学会とはこういうものだとして強烈に洗脳され、その結果として過去の歴史のなかにもありますが、「学会のあり方検討委員会」の委員長をやれとかいろいろと言われました。そんななかで、その当時は技師会と学会支部が各都道府県ごとにあり、技師会の活動と学会の活動はほとんど同一、会費納入も両者一括ですから、皆が学会、学会と言っているけれど技師会の一つの学術活動をする組織のような感じで、すべてが技師免許を持った人たちだけの学会でした。もちろん会則は誰もが自由に入会できるように定められていますが、これをなんとかもって広げて医師や理工学者、教育者などが自由に入るような学会にしたいと、そのためになんとか頑張りたいと考えていました。少しご質問からそれているかもしれませんが。

杜下：いえいえ。

山田：ご質問の大切にしてきたということの一つが、この学会を技師集団の学会から少なくとももう少し開かれた学会にしたいということでした。それからもう一つは長年役員をやっているなかで、この会を執行する唯一の機関は理事会です。学会総会は年に1回しか開かれませんが、理事会がすべての決定権を持って皆さんのために進めていくことになります。ですから、理事会の融和をはかりながら理事の皆さんが徹底的に責任を持ってやっていただく必要があるということを経験し、会長時代に痛切に感じました。理事会を大切にしないでいけないうことが、役員時代に特に大切にしてきたことです。

杜下：先生がそのようなお考えで学会運営をしてくださっている間に会員の数がどんどん増える時代を迎えますが、その当時やはり技師が中心で工学関係

の先生がほとんどおられなかった。

山田：おられなかったですね。

杜下：内田先生ぐらいですか？

山田：内田先生、それからお亡くなりになった中堀先生。

杜下：中堀先生。

山田：お二人の先生に理事をお願いしたのは、法人化するために文部省から言われたことなのです。当時はほとんどの理事は技師ですね。私も含めて。ですから学会である以上、学位を持った人、あるいは教育者などが理事に入らないと許可しないと、文部省から条件がついたものですから、このときに内田先生(内田 勝 当時、宮崎大学教授)、中堀先生(中堀孝志 当時、京都放射線技術専門学校長)に入っていたわけですね。この時期が技術学会の大きな変換点ですね。

杜下：なるほど。そういう先生のお考えが今やっとならずに実を結ぶようになって、放射線技師の教育が変わり、そして修士、博士まで終了した会員がいます。全国では修士、博士を修了した技師が500人位いる状況です。やはり学術団体として目指すものは随分昔から同じことを早くから考えていただいていたということで、本当にありがたいことです。

山田：そういう意味で今回、工学者であり大学教員である小寺会長が学会長になられたことが、私にとっては極めて感動的なことなのです。

杜下：なるほど。

山田：今までは考えられなかったことじゃないですか。小寺会長が就任されたことに対して私はとても嬉しい思いをしています。

杜下：長年の夢の一つだったんですね。

山田：そうです。

### 思い出に残る大きな出来事

杜下：それで先生、役員時代、学会長時代に思い出に残る出来事は沢山あったでしょうが、今振り返ってみられると大きな出来事とはどういうことでしたでしょうか？

山田：細かいことを言うときりがありませんが、二つ三つくらいにまとめてみますと、私が役員時代の企画委員長、総務理事時代に最も苦勞したことは、何度も申し上げましたように各県の技師会と学会支部が同一の都道府県で動いているために、これをなんとか打破しないことには、技師以外の工学者等の方々に入ってもらえるような学会には絶対ならないということです。ということは支部をなんとかなくして本部直轄で入会できるような組織にしなければなりません。都道府県単位の支部があるからそういう拘束を受け

てくるわけでしょ？

杜下：なるほど。

山田：例えば京都府技師会と学会京都支部が共存し、両者の会費納入も一括ですから技師免許をもっていないその他の人は単独で学会支部だけには入りにくいことになります。これをなんとかして打ち破らなければならないということで、支部廃止を訴えました。支部廃止の問題はずいぶん前から話が出ていましたが、しかしいくら支部に言っても無理と感じました。そこで会費を本部直納制にすれば必然的に会員個人と本部が直結するので、支部の存在感が少しは薄められますし、それから支部をまとめていく方が早いのではないかと考え、それからは会費本部直納制を一生懸命頑張りました。いろんな部会や支部に行き、ちょうど総務理事時代でしたが、どこに行っても猛反対を受けました。今までやってきた支部の活動を何と考えているんだと、ものすごい反発を総会でも受け、総務理事としての答弁をしなくてはならず、ずいぶん苦労しました。それが大きな思い出の一つです。

もう一つは法人化ですね。任意団体を法人にするのは前々から言われてきたことですが大変なことです。名誉会員の橋本先生(橋本 宏 財団法人ライフエクステンション研究所)には東京でずい分と動いていただきました。1975年に許可がおりたのですが、私も理事の一員としてずい分と頑張りました。これも一つの大きな思い出です。ここではじめて文部省から理工学者、教育者、学位を持った人を理事に入れないと認可しません、と言われて、内田先生、中堀先生のお二人に本部の理事として入っていただいたわけです。お二人とも教育者であってかつ工学博士でいらっしゃいましたから、これでやっと認可されました。これが大きな思い出です。

それともう一つだけ思い出があります。それは、この頃の会長というのは年度会長制でして、総会開催地から選ばれた会長が1年だけやって、年度ごとに会長は代わっていました。それはいかんと長年訴えて、やっと私が総務理事の時代に会長と大会長を離そうと、会長は複数年で学会全体をみて、大会長は総会開催だけを見る。今までは会長名でもって総会が開催されても、その会長は総会開催だけに専念されるため、地方におられてしかも単年度ですから、本部の面倒はほとんどみられませんでした。それでは本当に本部の仕事は誰がやるのか。その当時、会長に代わる者といえば総務理事しかなく、これにものすごい負担がかかりました。対外的にも会長と総務理事では全然違いますし、会長は複数年度にしようと言いました。言った立場上、逃げるわけにもいきません



から、皆様のご支援を得て、私が初めて3年間の複数年年度の会長になりました。こういういきさつがありましたが、これも思い出の一つです。

杜下：1988年に会長になられたということですね。

山田：そうです。

杜下：現在でも新しい公益法人化に対していろいろ検討しておりますが、今お話していただいたなかで、参考になる話が沢山ありました。また、地方部会と本部との考え方、昔からどのように考えられていたのかがよく分かりました。非常に参考になりました。

山田：支部の話に少し戻りますが、冒頭に申し上げました林 周二先生は都道府県単位の学会支部を廃止しなければ、このままでは学会が発展しないということをも痛切に訴えられていました。その林先生はご自分の所属される奈良支部はつくらずに、奈良・和歌山・大阪をまとめて関西支部とされました。そのため47都道府県でも支部が二つ少なく、45支部だったのです。このような熱い思いがやっと実ったのですね。

杜下：自分のできる範囲から理想に近づけ、それを広げられていったということですね。

山田：そういう思想と熱意をものすごく仕込まれましたから、後々にこういう形に少しは努力できたのではないかと考えています。

杜下：なるほど、ありがとうございます。

### 計測部会の立ち上げ

杜下：それから先生、会長を退かれましてから2年後に計測部会の準備委員会の委員長をしていただいたと記録にあります。この計測部会、現在は分科会になっておりますが、これをおつくりになろうと思われた理由と伺いますか、私たち若いものにしてみたら放射線の計測というのはすごく大事なことなので、もっと昔からある歴史ある分科会かと思いましたが、

山田：当時としては発会が一番遅いですね。

杜下：ええ。その後、防護分科会、医療情報分科会

と続きました。このあたりいかがでしょうか？

山田：実はこれにも長い歴史といきさつがありました。先ほど申し上げました学会が法人になったときに内田先生が理事に入られました。入ってこられるなり内田先生は部会、分科会に対するご自分の考え方を強く言われまして、「山田さん、とにかくこの技術学会の底辺を支える研究組織は画像と計測である」ということでした。分科会は縦割りでしょう？例えば撮影や治療、核医学などです。そうじゃなくて技術学会の基礎学問領域、すなわちベースになるのは画像工学と計測学。この二つは部会として作らないといかんと、これは内田先生の自論でした。私は企画委員長をやっていましたが、その後内田先生が入られた1975年の法人化の2年後、すなわち1977年に画像部会を立ち上げられました。内田先生から、私も当時計測関係の仕事をやっていたから「山田さん、計測部会を作れ」と何回も言われていたのです。この頃の私は総務理事や会長の移行問題や会費直納制に伴う新しい支部問題など、大変に忙しくて誰かに頼まなければいけないと思いつつ時間が経過してしまいました。私はその反面、これだけ学会が大きくなると縦割りの分科会を作らないといけないと思いましたが、部会と分科会は全然違うんですよ。今はもう一緒になっていますが、内田先生の発想は「部会が技術学会の底辺を支える基礎学問領域、分科会は縦割りですよ」と。そこで撮影分科会、治療分科会、それから核医学分科会の三つ、当時はそういう割り方でしたから、このように3分科会は比較的早くできたのですが、残ってきたのが先ほどの計測部会。これは私に全責任があるのです。もし、私が計測の仕事をしていなければもっと早い時期に誰かに依頼していたと思うのですが、計測に関連してただけに遅れてしまいました。私が最後に会長を辞めなくてはならない時期になって、内田先生からの宿題でもあり悩みました。私はすべての役員を辞めるつもりをしていましたから、名古屋の前越先生(前越 久 名古屋大学名誉教授)のところに行きまして、「前越先生何とかやってください」ということで準備だけはやって、初代の分科会長には前越先生になっていただきました。当時は部会と分科会の考え方は歴然と離れていました。今はそう言っても分からないから一緒になりましたが、縦割りの分科会と学会のベースを研究する部会は違う。それがすごく勉強になりました。どうしても計測部会をつくっておかないと内田先生にも叱られますし、この学会の将来を考えても必要だと思い、これだけを果たさないと役員を辞められなかったということで、大変遅れて皆さんに申し訳なく思っています。そうい

う経緯です。

杜下：部会と分科会の違いについては初めて聞きました。われわれの世代では、聞き慣れているのは分科会で、どうして部会から分科会になったのか、知らないままに今を迎えていますから、よく分かりました。なるほど、いろいろなことがあったんですね。

山田：そうです。結果的に今になればそんな縦割りだ、横割りだ、なんて言わなくても必要とする研究集団を作ればいいのであって、現在でいいと思います。でも最初はそういう発想です。

### 若い会員へのメッセージ

杜下：最後になりますが、今の会員の半分が20代、30代です。若い人たちに対してメッセージをお願いします。

山田：私の念願は一貫して先ほどから申し上げましたように、やはり技師に限定されない拓かれた学会になりたいという思いでやってきました。最近では各教育機関に大学院、そして博士課程もできました。そういうところで最高の教育を受けて、しかも学位をとった人たちがこの学会の中心を担ってほしいと思います。そういう人たちが中心になって学会発表を積極的に行い、土井先生がいつもおっしゃっているように論文を書き、その結果として学会誌が発展し、また研究発表会が発展し、そして学会全体の発展につながるわけです。最近ではそういう若い人たちの発表数が非常に増えているので、大変に喜んでます。そういう博士課程を出た人たちが中心になってこの学会を持ち上げてほしいと、心から願います。私たちが古い時代をなんとかここまで乗り切ってきましたけれども、先ほど言った小寺会長が中心になっていろいろな方々が活躍されて、私はこの数年大変に嬉しく思っています。どうか若い方々に今後とも大いに頑張ってもらいたいと思います。

杜下：今日は秋の行楽シーズンということで、先生大変お忙しいなか、この学会会場に足を運んでいただきまして、これまでの技術学会をどうしてつくってこられてきたか、またこれからどうすべきかということについて非常に貴重な話を聴かしてしていただくことができました。これから先生のお言葉を参考にさせていただきます。ありがとうございます。

先生、今日はお忙しいなかありがとうございます。

山田：更なる発展を願っております。頑張ってください。

杜下：ありがとうございます。

## 山田勝彦先生—学会歴—

## 【役員】

1969～1990年	理事
1971～1975年	編集委員会委員長
1976年	庶務委員会委員長
1977～1984年	企画委員会委員長
1982～1987年	総務理事
1985～1987年	研究奨励選考委員会委員長
1985～1987年	梅谷賞選考委員会委員長
1986年	表彰委員会委員長
1988～1990年	会長
1992年	計測部会準備委員会委員長
2000年～	名誉会員

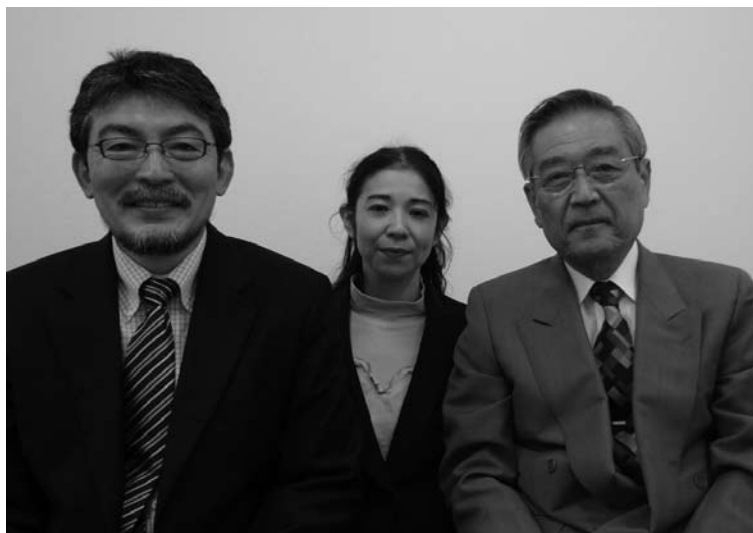
## 【表彰】

1983年	奨励賞
1991年	学会賞
1994年	法人取得に対する功労(第50回総会記念特別表彰) 学会永年勤続者(第50回総会記念特別表彰)

## 【学術大会】

1973年	宿題報告「X線診断領域における線量測定とその問題点」
1990年	シンポジウム座長「放射線計測の現状と将来」

追記：本稿印刷工程中に、突然にも内田 勝先生の訃報に接しました。先生がご生前中、私たちに熱意溢れるご指導をいただきましたことに対し深甚なる感謝の意を表しますとともに、ここに謹んでお悔やみ申し上げます（山田，杜下）。



インタビューを終えて（右：山田勝彦先生，左：インタビュアー杜下淳次，中：収録を手伝っていただいた遠山景子先生）